
蒼穹の銀さん

澄風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の銀さん

【Nコード】

N3131R

【作者名】

澄風

【あらすじ】

攘夷戦争で圧倒的な強で敵味方双方に恐れられた伝説の侍”白夜叉”坂田銀時。修羅場を乗り越えて川原で一息付いていると、光り輝く何かを見つけ歩み寄ると、気が付けば異世界にいた。偶然助けしてくれた少女、鷹崎在紗と鷹崎駆真と共に始まる新生活。彼は異世界でどのように生きるのだろうか？

プロローグ（前書き）

新刊を読んでとうとう書いてみました。

ほぼ原作沿いに進み、オリジナル短編をたまに入れ、銀魂ストーリーに進もうと思っています

プロローグ

日も暮れ始め、太陽が徐々に沈んでいく中、赤く染まった空の下にある戦場の跡。

死体を喰らうカラスが無数に翼を羽ばたかせて飛び、無残に日本刀や槍などの刀剣類を始め、矢や銃弾などで命を散らした武士達が血にまみれた物言わぬ屍となっている。

そんな無数の死体が転がる戦場に年若い一人の少年が死体から金品を始めとした金目の物や刀などを剥ぎ取っていた。

十歳前後位の歳に日本人では珍しすぎる銀髪の天然パーマ。

死んだ魚の様に気の抜けた目。

顔はそれなりに整っているが、覇気という物を感じさせないか何ラソクか落としている様に見える。

黒衣着流しに身を包むのは碌に栄養のある者を食べてないせいで痩せ細った体。

死体から奪った日本刀を片手に少年は、死体の一つを椅子代わりに座り込んで一息を付く。

傍目から見れば死体荒らしなど褒められる事ではないだろうが、この時代は野盗や百姓にとって、戦場は宝の山とも言える貴重な場所だった。

死んだ武士が持っている日本刀や品の良い着物などは高く売れ、誰もが似たような事を平然としている。

少年もその一人である。

生きる為に死体から物を剥ぎ取っていた。

「屍を喰らう鬼が出ると聞いて来てみれば……君がそう？」

突然、声を掛けられて少年は振り向くと一人の男がいた。

三十路前後位で長い髪に整った顔立ちをしているが、腰に帯刀みそじをしている事から恐らく武士であろう。

少年は歩み寄って来る男を警戒しながら、いつでも逃げられる様に男から目を離さず見極めていた。

誰かに言われて殺しに来たか？

それとも偶然通りかかっただけか？

一人で生きてきた少年は目の前の男の目的が分からずじつと見つめる。

すると男は少年の癖のある銀髪頭へと手を伸ばして柔和な微笑を浮かべると優しく頭を撫でた。

「また随分とカワイイ鬼がいたものですね」

「!?!」

突然頭を撫でられた少年は男から手を払い除けると後ろに跳んで拾った刀を半分抜いて男にいつでも迎撃体制が取れるようにする。

男は少年の行動の気分を悪くしたわけも無く、睨んでくる少年を微笑を浮かべながら見ていた。

「刀も屍それから剥ぎ取ったんですか」

「・・・・・・・・」

男の質問に少年は答えずに半分抜いていた刀を抜いて鞘を捨てる。

「童わらわし一人で屍の身ぐるみを剥ぎ、そうして自分の身を護ってきたんですか。たいしたもんじゃないですか・・・・・・・・ただ、そんな剣もついでにありませんよ」

男は少年を優しくたしなめるように言う。

「他人ひとに怯え、自分を護る為だけに振るう剣なんて、もう捨てなさい」

男は腰に挿した武士にとって魂とも言える日本刀を腰から取ると、少年にヒョイと投げ渡した。

「くれてあげますよ、私の剣」

少年は男の行為に驚きながらも投げられた日本刀を空いた手で受け取る。

日本刀は武士にとって大事な物である事位は少年でも十分に知っている。

それを投げ渡すという事は、武士が魂をその人にくれてやる事に等しい。

男は少年に刀を投げ渡すと少年に背中を向けて歩き出しながら少年を試す様に言う。

「剣^{そいっ}本当の使い方を知りたいや付いて来るといい。これからは剣^{そいっ}振るいなさい。敵を切る為ではない、弱き己を切る為。己を護るのではない、己の魂を護る為に」

呆然と男の後姿を見つめる少年の頭に男の声が染み渡る様に響いた。

少年は男から受け取った刀を見てギョツと強く握り締めると男の後を追った。

これは、若き日の少年の孤独な人生の大きな転機だった。

そして時が経ち

少年から青年へと成長を遂げた侍
下にある戦場にいた。

坂田銀時は曇天の空の

敵は唯の同じ人間などではない。

天人^{あまんと}

江戸時代末期に突如宇宙から現われた異性人達の襲来。

突然現われ、理不尽な要求をしてくる天人達に対して、地球人は徹底抗戦を開始し、十数年に及ぶ攘夷戦争が勃発した。

数多くの侍、攘夷志士が天人との戦いに参加した。

坂田銀時もその一人である。

攘夷戦争の末期に高杉晋助、桂小太郎、坂本龍馬らと共にゲリラみたいに戦場を転々とし、数多くの天人を一刀の下に葬り去ってきた。

敵味方双方から『白夜叉』と恐れられた伝説の侍。

そんな彼も何百という天人に囲まれて窮地に立たされていた。

「うおおおおおおおおおお！！！」

吼えながら銀時は右手に握り締めた日本刀で様々な武装をしたミノ
タウロウス見たいな天人へと切り込んでいる。

振るわれる無情の刃は天人の頭部や胴体を切り裂き、血飛沫が銀時
の白い陣羽織などの戦装束を朱に染めていく。

周囲全体を警戒しつつ、銀時は一点突破を狙って止まらず切り込ん

で行く。

「だりゃあ!!」

振り下ろした刃で脳天を力付くで切り裂き、左右から襲ってくる敵を蹴り飛ばして次の敵の喉笛に突きを入れて刺し殺す。

まさに死人で無ければ出来ない命知らずの戦い方である。

誰しも勝ち戦になれば命惜しさに尻込みしてしまうが、銀時は命をかなぐり捨てて迷う事無く敵に切り込んで行く。

いつもは死んだ魚の様な目をしているが、今は獲物を狩るオスの獣みたいにギラついている。

振るわれる剣を一度求める事無く銀時は人間離れた跳躍力でジャンプをして、一人の天人の頭を踏みつけると、そのまま一気に頭を踏み砕く。

飛び散った脳漿が足にこびり付くが、そんな事を気にせずに銀時は次の獲物を見据えると飛び降りて、一人を一刀両断して地面に降り立つと、空になっている手に土を握りこませ、すぐさま立ち上がって土を目潰し代わりに殺気立っている天人に投げつけると一匹一匹急所を切り裂いて斬殺していく。

その途中で刀がとうとう使い物にならなくなって折れたが、すぐに敵の刀を二本奪って、二刀流で器用に振り下ろされる敵の鎚を捌き、返す刃で首を跳ね飛ばす。

もはや夜叉と呼ぶに相応しい戦いぶりに天人達は戦慄した。

銀時の姿は返り血で赤く染まっていた。

戦装束も癖のある銀髪すらも血で真っ赤である。

白夜叉というよりも紅夜叉と呼んだ方が正しいかも知れない。

無酸素運動を続けてきたせいか、息を荒くしているが、天人達は銀時の姿とこんな絶望的な状況にも関わらずに瞳に光を失わずに両手に握った刀を構える銀時を見て、殺せる気がしなかった。

人間一人を殺すどころか、逆に全滅させられるのは無いか？

そんな考えが天人達の頭によぎる。

「どうした牛肉共？捌かれて料理されるのが怖くなったのかですかコノヤロー。いいか、覚えとけよ。お前らがどんなに数を率いて来ようが、どんなに強え武器を持ってこようが、そんな物じゃ、俺の魂は折れねえよ！！」

両手を握り締め、銀時は敵に再び切り込んで行く。

最後まで美しく生きる為に……。

「ああ〜疲れた。全く年甲斐も無くあんなにハッスルもんじゃないねえな……………ツラ達はどうなったかな」

何とかあの絶望的な戦場を切り抜け、銀時は森の中に身を潜め、血塗れになった戦装束や体などを川で洗っていた。

血に染まった状態で川に入ったせいで体中の傷が沁み、一瞬川が真っ赤に染まったが、すぐに洗い流されて元の透明な水に戻った。

そんななか銀時は共に戦った仲間達の事考えていた。

高杉は左眼の負傷で戦線を離脱し、坂本は既に自身の夢に向けて去っている。

残るは桂だけだが、殺しても死ぬ様な奴ではないからきつと大丈夫だろう。

「とりあえず江戸に帰るか……………」

曇天の夜空を見上げながら銀時は呟くと、川の中で光り輝く何かを見つけた。

「なんだなんだ？ 頑張った俺に対する神様からのご褒美ですか？」

好奇心に惹かれ、光り輝く何かを銀時は手に取ろうと手を伸ばすと、光は銀時を包み込む。

「なっ！？ なんじゃこりゃあ〜一難去ってまた一難とか洒落にな

つてねえぞ！ 神様、俺に何か恨みがあるんですかああああッ！
？」

川原に銀時の声が響くが、光が消え去るとそこには誰もいなかった。

澄み渡る蒼穹の空。

蒼穹園と呼ばれる街の公園で一人の少女が買物籠を地面に置いて、ブランコに座り込んで揺らしていた。

年の頃は十から一つ二つ年月を重ねた位で、何よりも目を惹くのが白である。

生まれたばかりの子供を強力な漂白剤にでも漬けて育てれば、もしかしたらこのような容貌になるのであるまいか。

そんな馬鹿げた妄想をさせるほど、彼女は『白かった』。

背を覆い隠す髪を始めとして、その妖精の様に愛らしい美貌も、首も、腕も、足も、さらには身に纏ったワンピースさえも、一切が真っ白であった。

ただ、瞳だけが血の様に赤い。

少女の名は鷹崎在紗　　蒼穹園一の女騎士にして有名人の姪御である。

「ちよつと早く来すぎちゃったかなあ・・・」

在紗は携帯電話で時刻を確認すると、姉さまと慕う叔母との約束の時間まであと三十分以上あった。

今日は一緒に買い物に行くという約束をしており、在紗は約束場所の公園で楽しみにしながら仕事を終えてやって来る伯母を待っているのだ。

ブランコを揺らしながら時間が早く進まないかと思いつつチラチラと時刻を確認していると、在紗は草むらで光り輝く何かを見つけた。

「あれ何かな？」

興味惹かれて、ブランコから降りて恐る恐る草むらに近付くと、突如光が止む。

あの光りはなんだっただろう？

純粹な好奇心で在紗は草むらを覗き込むと、

「きゃあああッ！！」

思わず目を見開いて口許を押さえて悲鳴を漏らした。

それもしようがない事だろう。

草むらに全身血に染まった男が倒れているのだから。

「い、生きてる………!? とりあえず救急車を呼ばなくちや!」

倒れている男が呻いている事から生きているのだと知った在紗は、携帯電話を取り出して119と愛する伯母に電話を入れる。

どうしてこんな所に血塗れで倒れているのか?

一体何に襲われたのだろうか?

あの光はなんだったのか?

そんな疑問よりも先に聡明な在紗は、必要な場所へと連絡を入れた。

「次は姉さまつと………」

落ち着いて救急車に電話した^{アリス}在紗は次に伯母に電話をする。

ブツ。

『どうしたの在紗!? 何かあったの!?』

電話を鳴らしたと同時にワンコールすら鳴る前に電話に出るとい^{アリス}う人間離れした業で電話に出た^{アリス}在紗の伯母である鷹崎^{アリス}眞が突然のAコールに驚きつつ在紗に狼狽に満ちた声で聞く。

様であった。

「姉様！」

在紗が伯母を呼ぶと、女性 鷹崎駆真は顔を綻ばせて愛する姪へと両手を広げて走りよって抱きしめた。

「あ・り・さあああああああッ！！！」

さっきまでの凛々しい姿は何処に行ってしまったのやら、駆真はデレデレになってしまった至福の表情を浮かべる。

対する在紗はいつもの事なのか慣れた様に小さく苦笑しつつ電話した理由を話そうとする。

「それでね、姉さま」

「はっ！？ そうだそうだ在紗に会えた嬉しさで忘れてた！？ 何があったの！ お姉ちゃんに話してごらん！ 在紗に傷つけた奴をこの世の果てまで追いかけて消してあげるから！」

物騒な事を言う伯母に在紗は首を横に振ると、草むらに倒れている血塗れの男に指を差した。

「怪我をしているみたいだから、ちょっと救急車を呼んで病院に付

き添うねって言おうと
したんだけど」

「何だ、そんな事か」

在紗の事じゃないと分かった駆真は一安心すると、いつもの仏頂顔
に戻った。

在紗の事以外はどうでもいい。

鷹崎駆真とは、そういう類の人間である。

その後、救急車がやって来て、謎の血塗れの男

“ 白夜叉 ” 坂

田銀時は鷹崎駆真と在

紗に付き添われて蒼穹園の病院へと搬送された。

突然の侍の来訪。

それがこの世界にどんな影響を与えるのかは、まだ誰も知らない。

第一話 銀さんは新しい家族です！（前書き）

短いですが更新します。

銀時の天駆機関は何にしようかと悩んでいます、何か意見を貰いたいです。

第一話 銀さんは新しい家族です！

澄み切った蒼穹から阻害されなく照らされる光り輝く太陽が、今日も蒼穹園と呼ばれる街を照らす。

比較的平穏に見える唯の街の様に見えるが、空獣^{エア}と呼ばれる空にのみ存在する大地に嫌われた天空の怪物達の脅威があった。

だが、蒼穹園に暮らす人々は彼らに怯えて暮らす事は無い。

何故ならば護ってくれる騎士達がいるからである。

蒼穹園中央部にある蒼穹園騎士団本部。

紫紺の空戦衣を身に纏い、天駆機関と呼ばれる空を駆ける為の特殊兵装を使って、勇敢にも武器を手に空を舞い、遙か上空に存在する空獣^{エア}を退ける蒼穹園の誇る守りの要。

そんな勇敢な騎士団達の本部庁舎からほど近い一軒の家の前に癖毛の激しい銀髪の男、麗しい美貌を持ちながらも仏頂面の長い黒髪に深紅の瞳の女、長く艶のある白髪に深紅の瞳と白い肌が印象的な妖精の様に愛らしい少女が立っている。

「おいおい、ここがあんたらの家かよ？ 随分良い所に住んでんだなあ。」

癖毛の激しい銀髪の男 坂田銀時が感心した様に目の前に立つ家を見て言う。

銀時達の世界では江戸時代末期で木造建築が主流で、二階建ての家など江戸や大阪や京都などの都市にでも行かない限り無かった。

それゆえに白いコンクリートなどで建てられた洋風建築など珍しい物だった。

「文句があるのならすぐに出て行っても構わんぞ。身元不明の不審者を私と在紗の家に泊める事など、私は在紗の衛生上猛反対だからな」

十代後半位の長い黒髪と深紅の瞳の麗しい美貌の女 鷹崎 眞
が仏頂面で辛辣な言葉を銀時に、睨みながら吐くと、銀時はへいへいと軽く受け流した。

「けど、本当にいいのか？俺みたいな不審者を泊めてもよお」

銀時は隣に立っている白く愛らしい少女 鷹崎在紗に問うと、
在紗は優しく微笑を浮かべる。

「私は別に構いませんよ。姉さまもいって言ってくれましたし、行く場所も帰る場所も無いなんて悲しすぎますから……」

「ありがとうな……。この礼は必ずするからよ、楽しみにしてくれ」

銀時は優しく微笑む在紗に向かって頭を深く下げて心の底から感謝の礼を言った。

他人に頭を下げたり、素直にありがとうと礼を言うのを嫌う銀時だが、突然異世界にやって来てしまい、右も左も分からない中で親身

に優しく接してくれた在紗に感謝の言葉が尽きない。

「とりあえず家に入ろうか、折角帰ってきたんだし。この天パーの部屋を用意しなければならんからな」

駆真が在紗に優しい視線を向けてお姉さんらしい声音で、銀時に対してはようやく会えた仇敵を見るかのような睨みを利かせつつ冷たい声音で言う。

「うん、そうだね、姉さま。銀さんの部屋の用意とかしなきゃいけないもんね」

「・・・先に家の中に入ってて、ちょっとだけ天パーと話があるから」

「うん！先に銀さんの部屋の用意をしてるからね」

家の中に入っていく在紗を見ると、駆真は銀時に真っ直ぐ向き直る。

「あのさあ、その視線やめてくれない・・・ガンを飛ばすどころか、ビームが出てきそうなんだけど」

駆真の仏頂面と憎悪を始めとした、あらゆる負の感情が込もった鋭い睨みに銀時は居た堪れなくなって元凶に言う。

「気にするな。貴様にだけ特別だ。ありがたく受ける」

「どんだ俺が嫌いなんだコノヤロー。30文字以内で答えてくれない？ できたら直すからさあ」

「いいだろう。【在紗に近付くな、触れるな、話しかけるな、家から出て行け】」

「どんだけ、ニスコン（ニース・コンプレックスの略）なんだよ！程にも限界があるだろうが！」

あまりにも酷すぎる直球な要求に銀時は反論する。

だが、駆真は聞く耳持たぬという堂々とした態度で受け流し、銀時を真っ直ぐ睨みながら怒気の込もった言葉を紡ぐ。

「在紗の何よりも尊い天使のごとき恩情に感謝しろ天パー。しばらく私と在紗の愛の巢じゃなかった　家に泊めてやる。だが・・・もしも在紗に嫌がる事を一つでもしてみろ　」

駆真の言葉にこもる怒気がどんどん風船の如く膨れ上がっていくのを銀時は、直感で感じて全身に嫌な汗を掻き始める。

それほどまでに目の前の駆真から、今までに戦場で出会ったどんな天人をも上回る圧倒的な威圧感を感じていた。

駆真の頭の中では目の前の死んだ魚の様な目をした銀髪为天パーが、天上天下唯我独尊、この世とあの世を含めて全世界一で最も神聖で尊く可憐な最愛の姪に手を出す瞬間を思い描く。

『グヘヘヘ！　在紗ちゃん可愛いねえ！俺が好い事を教えてやるよ』

『いやあ〜！！　やめて！！』

『助けを求めても無駄だぜ、あの女は今遠征で留守なんだからな』

『いやあ〜！！助けて姉さまあああああ！！！！』

脳内で在紗の助けを求める声が響くと共に、遂に怒気が頂点に達する。

頭の中で何かが切れた駆真が銀時の首もとの服を両手で掴んで宙に浮かせ、吊り上がった深紅の瞳をクワツと目を見開いて吼えた。

「いいか天パー！！！！もし在紗に指一本触れてみるおおお！！！！
！ 貴様が何処に逃げようとも地獄の果てまで追い回して必ずとっ
捕まえてぶち殺し！！！！この世全ての拷問の歴史を走破して！！
！ １ミクロン以下に切り刻んで空獣の餌にして未来永劫崇り続け
てやるうううう！！！！ジエノサアアイツ！！！！ジエノサアア
アアアアアイツ！！！！！！」

「おいおいマジかよ……………」

家の前で男を掴み上げて狂った様に叫ぶ駆真。

そのあまりもの迫力に銀時は気圧されて碌に何も言えずに呆れていた。

「姉さまどうしたの！？何か獣の叫び声みたいなのが聞こえたんだけど！？」

玄関のドアの隙間から在紗が心配そうに顔を覗かせると、鬼神や般若の如く怒りに染まっていた顔は、即座にいつも在紗だけに向ける見惚れる様な笑顔になっていた。

「うっん、何でもないよ？」

手を離し、崩れ落ちる様に銀時は道路に転がり、目の前の恐ろしい女と同居しなければならぬと思うと痛くなる頭を抱えた。

鷹崎駆真　　蒼穹園で最も有名な騎士にして蒼穹を統べる最強の魔女。

鷹崎在紗の叔母にして、家族である彼女の实体は　　それは、姪の在紗の為なら世界すら滅ぼしてみせるといふ在紗絶対主義の超過保護な女であった。

第一話 銀さんは新しい家族です！（後書き）

次回予告

とりあえず今回で駆真がどついつキャラなのか知ってもらえたと思いますので、次は銀時と鷹崎一家の出会いを中心に書きます。

お楽しみに。

第2話 銀さんは異世界の人？（前書き）

キャラの魅力を引き出しきれなかった感が否めないと思いますが、投稿します。

第2話 銀さんは異世界の人？

駆真の脅迫が終わり、鷹崎家にお邪魔して自身がこれから暮らす部屋の整理を銀時、在紗、駆真の三人はしていた。

「よしっ！こんなもんだらう。後はコレを持っていくだけだ」

何かの資料らしき本が沢山入ったダンボール箱を持ち上げた銀時は、これから自身が暮らす部屋をぐるりと見渡す。

8畳以上ある和室で、元々は駆真の実兄で在紗の父である鷹崎宗吾が使っていた部屋らしい。

蒼穹園の騎士であり優秀な研究者でもあったらしい彼の部屋は、彼がいなくなってからそのままの状態で、たまに掃除する程度の空き部屋同然だったらしく、散らばっている資料などを片付けて掃除するだけで住める様になった。

昼過ぎから始まった作業だが、もう既に陽が暮れ始めている。

「銀さん。もうすぐしたら夕食が出来ますから来て下さいね」

「おう、コレを倉庫に持っていったらすぐに行くぜ」

部屋の入り口のドアが開いて、ドアの隙間から在紗がピョコッと顔を覗かせて言うと、銀時はダンボール箱を持って部屋を出て行った。

（それにしても俺がこの世界に来て、もう五日か・・・早いもんだな。目覚めたばかりの時はさすがに色々と焦ったからな・・・）

自身の目の前を歩く在紗の後姿を微笑ましく見ながら銀時は目覚めた時の事を思い返した。

曇天の下に行われる血で血を洗う殺し合いが当たり前の様に行われる戦場跡で銀時は、傷付いた仲間を背負い、ひたすら歩いていた。

「もう少し辛抱しろよ、今俺がお前を仲間の元まで連れてって手当てしてやるからよお」

銀時は重傷を負った仲間を励ましながらひたすら歩く。

もうどれだけ歩いたのか分からない。

こうして歩いている間にも仲間がどんどん衰弱して弱っていくのが背中越しに分かる銀時は、さすがに焦り、まだ見えぬ仲間達に苛立ちを感じていた。

そして次の瞬間
銀時が背負う仲間が力尽きて銀時の背に
押し掛かる。

「おい！ どうしたんだよ！ 暗いけどお寝ん寝にはまだ早すぎるぜ！ 起きろ！ 寝たら死ぬぞ！」

頭の中では背負う仲間がどうなったのか理解できている。

それでも認めたくなかった銀時は冗談交じりに声を出して仲間を鼓舞する。

だが、返事は返ってこない。

当然である もう既に仲間は息絶えているのだから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銀時は無言で歩きながら曇天を見上げる。

すると、冷たい雫が頬を伝う。

それは曇天から降る雨だった。

身も凍る様に冷たく強く降り注ぐ雨は全てを洗い流す。

戦場で浴びた返り血、泥などにまみれた戦装束、止めようにも止められない目から溢れる一筋の雫。

曇天の雨空を無表情で見上げ、雨に濡れた銀時を見て、泣いている様には近くでは見えないだろう。

だが、遠くから見れば、その悲しげな姿は泣いているのだと誰もが理解できる。

また守ること出来なかった。

背負っていたモノの重みが無くなって、それがどれだけ大切だったのか銀時は、この時改めて悟った。

その時だった。

雨が降り注ぐ曇天の中に光り輝く何かを銀時は見つけた。

とても暖かく、太陽の様に生きる命に活力を与える光。

銀時は届かぬと分かっていたいようとも縋り付く様に手を伸ばす。

光りには届いていない。

なのに　手に伝わる温もりを感じながら、銀時は一瞬暗闇に包まれて目を瞑り、再びゆっくりと瞼を開けると、そこには昔、キリシタンや伴天連ばてれんから聞いた事がある天使がいた。

それは白い少女だった。

都市は十歳前後位で、白いワンピースに身を包み、雪の様に白い肌と背を覆う長い白髪に優しげな深紅の瞳の愛らしく整った顔立ちに浮かべる柔らかな笑顔は、銀時にとって天使に見えた。

「あっ！？　目が覚めたんですね。三日間も眠り続けていたんで心配してたんですよ……」

少女が銀時の右手を、その小さく白い両手で包み込む様に握り、白

く清潔なベッドの上で仰向けに寝転がっている銀時の顔を覗き込む様に微笑を浮かべつつ見つめながら言う。

「ここは何処だ？ あんたは誰だ？」

銀時は、まだ完全に覚醒していない頭で白い少女に問うと、少女は礼儀正しく微笑みながら答える。

「ここは蒼穹園にある総合病院の病室で、私は鷹崎在紗っついています。ちよつと待つてくださいね、今先生を呼びますから」

在紗は握っていた銀時の手をゆっくりと離すとベッドの傍らにあるナースコールを鳴らす。

すると、すぐに看護師がやって来て、目覚めている銀時を見ると担当の医師を呼びに向かう。

医師がやって来るまでの間、少々沈黙が続いていたが、思いついた様に在紗は自身が保護した男の名前を知らない事に気づいて聞いた。

「そつえばあなたの名前は何て云うんですか？」

「そついやあ、俺の自己紹介がまだだったな・・・坂田銀時だ。みんなからは銀さんって呼ばれてるから、そつ呼んでくれ」

「分かりました銀さん。私の事も在紗っつて呼んでくれていいですよ」
脳が完全に覚醒した銀時は体を起こして、フレンドリーにお互い自己紹介をして終わると、白衣を着た担当医師らしき男がやって来て、事務的な声で銀時に状態を聞いた。

「目覚めたらしいね、体の状態はどうだい？君はその鷹崎在紗さんと、叔母さんが君を保護して、ここに搬送されてから三日間も眠り続けていたんだ。彼女達に感謝したまえ。この三日間の間、君を看病してくれたのだからな」

「そうなのか、わりいな迷惑かけちまって。少々体がダリいけど、もう大丈夫だ。胃袋がちよっと悲鳴を挙げてるけどな」

頭を掻きながら礼を言い、状態を告げると腹が減ったと主張する様に音が鳴る。

すると、医師の男が苦笑し、在紗がクスクスと笑う。

「分かった。とりあえず食事を用意しよう。食べながらでもいいから、君がどうして公園で血塗れの状態で倒れていたのかななどを詳しく聞かせてくれ」

食事を用意する様に男が電話をすると、在紗が思い出した様に床に置いてあった靴から小さなバスケットを取り出して蓋を開けると、色々な種類の具が挟まったサンドイッチが現われる。

「銀さん　よかつたら食事までの繋ぎに食べてください」

「いいのか？　自分用に持って来てたんじゃないのか？」

差し出されるバスケット内に入った美味しそうなサンドイッチに、すぐにも手を付けたい衝動を抑えながら銀時が聞くと、在紗は首を縦に振って頷いた。

「いいんですよ。元々銀さんが目覚めたら食べてもらうつもりで持ってきてたんですから」

「そうか悪いわりくな。そんなじゃあ、いただきます」

在紗の言葉に銀時は感謝しつつ差し出されるバスケットの中からサンドイッチを一つ手に取って食べ始める。

最後に食事を摂ったのはいつだっただろうか？

戦場をひたすら駆け抜けていた為、空腹感など忘れてしまっていたが、久しぶりに喉下を通るサンドイッチは今まで食った何よりも美味く、手と口が止まらずひたすら動き続ける。

食べながら銀時は、窓の外を見てみると、江戸などとは全く別の街並みが見え、そこは自分の全く知らない場所であるが、今は気にせず食事を続けた。

「はい、銀さん、お茶ですよ」

「おお、気が利くねえ、サンキュー」

在紗からお茶が入ったコップを貰って、一気に流し込む様に飲み干すと銀時はとりあえず一息付いた。

「蒼穹園、騎士、天駆機関、空獣^{エア}ねえ。．．．寺子屋の授業じゃ、いつも寝てたけど、始めて聞く単語ばかりだ」

「江戸、攘夷戦争、侍、天人か．．．長い事多くの患者を見てきたが、異世界から来たなんていう患者は、さすがに初めてだよ」

看護師が持つて来た食事を食べながら銀時は、事態の確認の為に出来る限り全て話せる事は話した。

突如宇宙からの天人襲来、それに伴って始まった攘夷戦争、仲間と共に戦争に参加した事。

その果てに仲間を失って、自身も絶体絶命のピンチだった所を何とか切り抜けて、川で返り血を落としていた所で光り輝く何かを見つけて触れた瞬間、気が付いたら見知らぬ場所のベッドの上だった事。

銀時も医師も、黙って話を聞いていた在紗も信じられない事であるが、一つだけ分かっている事がある。

目の前にいる銀さんには、行く場所も帰る場所も無いという事である。

突然見知らぬ場所に放り出される。

もし自分がそうだった時の事を思うと不安で寂しくて壊れそうになるかもしれない。

在紗は、医師と色々これからの事について話し合っている銀時を見る。

平然としながら、この世界の事について色々と聞いているが、不安だろうと在紗は思った。

銀さんがこちらの世界に馴染むまで自分が手伝ってあげようと心に自分で誓いを立てる。

だが、在紗は気づいていない。

銀時に対する親切心こそが仇になり、最愛の叔母の手によって、何
度も銀時が命の危機に晒される事になるうとは。

夕日が沈み、鷹崎駆真は近頃毎日の様に病院に通っている最愛の姪である在紗の迎えに向かっていた。

今日も空獣^{エア}の迎撃に出て、少々遅くなったが予定通りに歩いて病院に入院している、先日在紗と共に保護した銀髪のパパーの青年が眠る病室へと足を運ぶと、そこで面白くないものを見る。

この世で最も美しく可憐で尊い最愛の在紗が、事もあろうに死んだ

魚のような目をした銀髪のパパーと、楽しそうに談笑しているではないか。

思わずクスクスと笑う在紗の顔に見惚れていたが、すぐに素の仏頂面に戻って在紗と楽しそうに談笑している男を、ターゲットの後を追跡するスパイや探偵の如く物影から観察する。

歳は二十歳前後くらいだろうか？

癖の激しい銀髪のパパーに死んだ魚のような目が特徴的で、顔はお世辞にもカッコイイとまではいかないが、それなりに整っている方だろう。

やけに無駄が無く鍛えられた体は一本の剣の様に真っ直ぐ見える。

（まあいい、とりあえず在紗を迎えに来たんだ。あの男の事は放っておこう）

在紗の余り見ない笑顔を見れたから良しとした駆真は、病室の中に入ろうとするが、思わぬ声を掛けられる事になる。

「おい・・・さっきからそんな所に隠れてないで中に入ってきたらどうだ。覗き趣味は悪いぜ」

部屋の中で在紗と談笑していた銀時は、駆真の存在に最初から気付いていたが、敵意は無かった為、無視していたが、いつまでも覗かれているのは気分が悪い為、声を掛けた。

声を掛けられた駆真はさほど驚いたりする事も無く病室に入る。

「姉さま！」

「姉さま？ ああ・・・話に出て来た叔母さんね」

在紗が嬉しそうに、銀時が思い出した様に呟く。

だが、当の本人は在紗の姿を確認すると、両手を広げて在紗に抱きついた。

「あ・り・さあああああああッ！ お姉ちゃん迎えに来たよ！」

一方的に抱擁して在紗を抱きしめたまま、仏頂面を崩してとろけきつた表情でクルクル病室の中を回る駆真。

その姿を銀時は話に聞いていた以上だと思いつつ呆れた顔で見ている。

「おいおい、溺愛とかそういうレベルじゃねえだろコレ」

呆れた様に引き気味に呟くが、当の本人は気にせず回るのをやめて、腕の力を抜いて胸元の少女と目を合わせる。

「遅くなっちゃってゴメンね。寂しかったでしょう？」

「ううん、銀さんが話し相手になってくれたから寂しくなかったよ、姉さま」

次の瞬間、駆真はピシリと固まって顔を引き攣らせて、在紗のある言葉を頭の中で反芻した。

『寂しくなかったよ』

その言葉が何度も頭の中に響き渡る。

まるで自身の御株を奪われた様な気がして駆真は、ベッドの上で頭を掻きながら欠伸をしている名も知らぬ天パーを睨みつける。

そして、在紗が次に言った一言で銀時は、駆真の最優先抹殺リストの頂点に君臨する事となる。

「あのね……姉さま……銀さんをしばらくウチに泊めて欲しいの……」

第2話 銀さんは異世界の人？（後書き）

駆真の抹殺対象となった銀さん。

果たして無事に生き残る事が出来るのか？

第三話 鷹崎駆真は天パーを抹殺する（前書き）

今回は少々キャラ崩壊してますが、基本的にキャラは原作通りになり壊さずにいこうと思います。

第三話 鷹崎駆真は天パーを抹殺する

『あのね……姉さま……銀さんをしばらくウチに泊めて欲しいの……』

最愛の姪の口から聞いた始めてのお願い。

在紗の頼みにノーと言える筈の無い駆真は、その場は頷いたものの。

在紗を誑かした天パーを抹殺するべく計画を練っていた。

「やっぱり、暗殺しかないか……！！！」

蒼穹園騎士団本部の隊舎の中にある図書室で駆真は、物騒な事を呟きながら昨夜出会った名も知らぬ銀髪为天パーの抹殺計画を色々と資料を取り出して思案していた。

並ならぬ殺気と気迫を醸し出しながら【完全犯罪大全集】や、【むかつくアイツを消しちゃえ】などというサスペンス小説を読み漁っている姿は、他者に有無を言わせぬ迫力がある。

あらゆる資料を読み漁る駆真だが、さすがに公然に真正面から殺るわけにはいかない。

在紗を残して逮捕される訳にはいかない。

そんな事になれば在紗が悲しんでしまう。

あの天パーが死んでも少々悲しむだろうが、そこは自分が慰めれば

万事オーケーである。

私と在紗の二人だけのベリースウィートホームに住ませる事も無いのだ。

すべて丸く収まる。

歪んだ考えを抱きながらも駆真は、在紗との甘い同棲生活の日々を思い出して、涎を垂らしつつ恍惚の表情を浮かべるが、すぐに元の仏頂面に戻って計画を練り始めた。

「はあ？ 狙撃の秘訣を教えるだって？ どうしたんだ一体？」

鷹崎小隊の隊舎で駆真は、銀時を遠方から狙撃暗殺するべく、鷹崎小隊副隊長にして狙撃のエキスパートである三谷原雄一曹長に珍しく頼み込んでいた。

眠たげな半眼と無精髭の生えた顎、曲がった猫背が印象的な彼の男は数少ない駆真の家の事情を知る人間の一人であった。

突然、狙撃の秘訣を教えて欲しいなどと頼まれた三谷原は、怪訝な表情で口に啜えた煙草から紫煙を吹かしながら問うが、駆真は仏頂

面のまま答えない。

「いいからさつさと教える。ちょっと質の悪い敵が現われたんでな、今日中に始末せねばならなくなつたんだ」

「どんな敵だよ？ お前さんならどんな敵だろうと拳でケリが付くだろうに・・・」

「特殊な任務でな、公然と殺るわけにはいかない。だからこそその狙撃能力が必要なんだ」

「なら俺がやった方が確実じゃないか？ お前射撃とかそんなに得意じゃなかつただろ」

駆真は基本的に戦闘では銃など使わず、拳などの格闘術で戦う。

いわゆるフロントアタッカーというやつである。

三谷原は、駆真の並ならぬ態度に気遣わしげに協力を申し出るが、駆真はぶっきらぼうに断る。

「ダメだ。特殊な任務だと言つた筈だ。奴だけは私の手で仕留めなければならぬ。生まれて初めての最大の外敵だ」

「そ、それほどか・・・」

紫煙を吹かしながら三谷原は、凄まじい気迫と殺気を醸し出す駆真の深紅の瞳に圧されて、

冷や汗を掻くと、やれやれと言わんばかりに口に啜えたタバコを携帯している灰皿に捨てた。

「付け焼刃で何処までできるか分らんが、面白そうだ。教えてやるよ」

「そうか念入りに頼むぞ。奴を一撃で仕留める為にな」

愛用しているスナイパーライフルを片手に二人は隊舎の部屋から出て行く。

その一方 銀時は自身が命を狙われている等とは知らずに病院の売店で雑誌を立ち読みしていた。

「へえ〜漫画なんて始めて見たけど面白いもんだな」

【週刊少年ジャンプ】と表紙に書かれた漫画雑誌を興味半分で立ち読みしたが、コレが中々面白く、嵌まってしまって動けない。

是非買いたいのが、買おうにも、この世界のお金が無いから何も買う事ができない。

何度も読み返すが、面白い。

だが、このギンタマンというやつはどうもいただけくない。

こんな作品を載せようとは、担当者は一体何をしているというのだ。

「さてと、ジャンプも十分に堪能したし、戻るとするかあ」

ジャンプを本棚に戻して、銀時は自身の病室に戻りながら、これらの事を珍しく真剣に考えていた。

(在紗と、その叔母の家にしばらくお世話になるって事になったけどよお。やっぱりずっといるわけにはいかねえからな、とりあえず腕っ節には自信があるから空獣^{エア}とかっていう奴を狩る蒼穹園騎士団にでも入って、自立の為の金でも溜めるか……)

銀時自身、空獣^{エア}というものの実物を見た事は、まだ無いが、伊達に天人達を相手に戦った攘夷戦争を生き残ってはいない。

刀を手に 相手がなんであろうと切り伏せられる自信はあった。

病室に着いた銀時は、窓の外に広がる蒼穹を見上げる。

攘夷戦争中は曇天ばかり見ていたせいか、青々と広がる蒼穹は新鮮な物に見える。

「うん？」

窓の外に広がる蒼穹を眺めていた銀時は、長年戦場で培われた直感力でそれを感じ取り、いつもの死んだ魚の様な目から戦場を駆ける夜叉の様にギラついた目へと変わって周囲を探る。

(何か狙われてやがるな、何処からだ?)

周りを見渡すが、それらしい奴はいない。

だが、殺気ははっきりと感じる。

いつ襲われても対応出来る様に身構える。

そんな銀時の様子を、病院から約700メートルほど離れたビルの屋上で駆真はスナイパーライフルのスコープ越しに見ていた。

「覚悟しろ天パー。今日が貴様の命日だ。このカルマ13（サーテイン）に仕留められなかった獲物など存在しない」

某殺し屋みたいに黒いスーツを身に纏い、黒いサングラスを掛けた駆真もといカルマ13が口許に不敵な笑みを浮かべて、銀時を射殺する絶好のタイミングを待つ。

失敗など許されない。

今日奴を仕留めなければ、明日には我が家へとやって来てしまうのだ。

私と在紗の愛の巢もといベリースウィートホームを守る為だ。

おとなしく我が凶弾に倒れるがいい。

そして運命の時は来た。

風が止み、絶好の狙撃タイミングがやって来たカルマ13は、銀時の額にスナイパーライフルの照準を合わせてトリガーを弾く。

一発の銃声と共に発射された銃弾は、真っ直ぐ銀時の眉間へと向けて空気を切り裂きながら向かう。

仕留めた！！

カルマ13は、そう確信した瞬間だった。

銀時が突如こちらを睨み付け、手に持った果物ナイフで音速を超えて飛んでくる銃弾を一閃して叩き切った。

すると、まるで挑発でもするかのようにカルマ13の方を睨み付け、掌を上に向けて親指を除く指をクイクイと動かす。

「なっ!?!」

あまりにも非常識な出来事にカルマ13は驚きの声を漏らす、再びトリガーを何度も弾く。

だが、その全てが果物ナイフ一本で叩き切られた。

天パー抹殺計画は失敗した。

このままでは、あの天パーを神聖不可侵領域の我が家に招き入れなければならぬ。

カルマ13は、あらゆる負の感情が込められた眼差しで睨み殺さんばかりにスコープ越しに見える不敵に笑うム力つく顔の天パーを睨みつける。

「くっ! おのれえええッ!! 今日はこちらまでにしておいてやる。命拾いしたな天パー!!」

怨嗟の声を吐きながら、カルマ13は屋上を後にした。

「ふう〜悪は去ったか……しかし、何だったんだ。あの野郎？」

突然の銃撃から逃れた銀時は、ボロボロになった果物ナイフをテーブルの上に置くと、ベッドに寝転がった。

この世界に来て、まだ四日しか経っていないし、目覚めたのは昨日の事だ。

命を狙われる理由など思い当たらない。

「まあ、考えてもしゃ〜ねえし、部屋でも片付けとくか」

床に落ちている叩き切った銃弾をベッドの上から見据えると銀時は、拾い集めてゴミ箱に捨てた。

コンコン。

「ど〜ぞ」

病室のドアがノックされて銀時が入って来る様に促すと、ドアが開いて見知った白い少女が学生服姿で入って来た。

「こんにちは、銀さん」

「おお、よく来たな。まあ、適当にくつろいでくれや」

その後、二人は駆真が迎えに来るまで楽しく談笑をした。

そしてその一方　坂田銀時抹殺に失敗したカルマ13こと鷹崎
駆真は、蒼穹園隊舎で新たな抹殺計画を思案していた。

そして翌日　坂田銀時は退院して鷹崎家へとしばらく居候する
様になった。

第三話 鷹崎駆真は天パーを抹殺する（後書き）

ようやく、銀時の引越しが終わりました。

次はいよいよ騎士団入団と戦闘に入りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3131r/>

蒼穹の銀さん

2011年10月10日00時48分発行